

令和4年度 日野市平和事業

平和派遣事業成果報告書

< 沖縄・長崎・広島 >



日 野 市

目次

1	平和派遣事業の趣旨・目的			1
2	平和派遣事業概要			1
3	平和派遣事業報告会			1
4	広島伝承者平和講話会			2
●派遣者発表 沖縄				
	日野第一中学校	3年	さいとう しほ 齊藤 信穂 さん	4
●派遣者発表 長崎				
	平山中学校	1年	いまかわ けいご 今川 桂吾 さん	8
	日野第六小学校	6年	なんば ゆうせい 難波 佑成 さん	11
●派遣者発表 広島				
	日野第二中学校	1年	あめみや しょうた 雨宮 将太 さん	18
	日野第四中学校	1年	おおの まりか 大野 真理佳 さん	21
	豊田小学校	1年	かざまつり みいこ 風祭 美意子 さん	25
	日野第四中学校	2年	かとう ひな 加藤 日菜 さん	28
	日野第六小学校	6年	きたはら ゆい 北原 佑彩 さん	32
	大坂上中学校	1年	やぎした こゆき 八木下 湖雪 さん	36
	豊田小学校	5年	やまざき りこ 山崎 莉子 さん	39
	来場者アンケート			42
	日野市民憲章／日野市核兵器廃絶・平和都市宣言			44

1、平和派遣事業の趣旨・目的

平成 26 年から始まった日野市平和派遣事業は、第二次世界大戦下で多大な戦火に遭った「広島」「長崎」「沖縄」の各所に、市内在住の小中学生及びその保護者を派遣し、平和について学んでいただく事業です。

また、学んでいただいた内容を発信し、広く市民と共有していただくことで、二次的な平和意識の伝播を促進し、日野市民全体への平和意識の啓発を図っています。

2、平和派遣事業概要

派遣期間 令和4年 7月～10月

派遣先 広島、長崎、沖縄

派遣者 下表のとおり

(発表順、敬称略)

派遣先	派遣児童生徒	保護者
沖縄	齊藤 信穂	齊藤 加奈子
長崎	今川 桂吾	今川 友里
	難波 佑成	難波 衣理子
広島	雨宮 将太	雨宮 克臣
	大野 真理佳	大野 好美
	風祭 美意子	風祭 舞子
	加藤 日菜	加藤 由香里
	北原 佑彩	北原 尚子
	八木下 湖雪	八木下 志保
	山崎 莉子	山崎 聡子

3、平和派遣事業報告会

お集まりいただいた皆様に、派遣された皆様の思いを発表していただきました。発表された生の声に、参加者はそれぞれ平和への思いを馳せました。

日 時 令和4年11月13日(日)

会 場 多摩平の森ふれあい館 集会室6



4、広島伝承者平和講話会

平和派遣事業報告会と同日に開催。広島市から被爆体験伝承者の方を招き、被爆体験者から受け継がれた貴重なお話を伺う講話会を開催しました。

日 時 令和4年11月13日(日) 15時 00 分から 16時 30 分まで
場 所 多摩平の森ふれあい館 集会室6
講 師 被爆体験伝承者 檜原 泰一(ならはら やすかず) さん
参加費 無料
参加人数 68名

被爆体験伝承者 檜原 泰一(ならはら やすかず)氏 プロフィール

1975年 東京生まれ(東京育ち)

1994年 明治学院大学法学部政治学科入学

同年夏に広島へ初めて平和学習で訪問し、以後毎年 8 月 6 日は広島で過ごしている。

1998年 東急百貨店入社(現在は東急電鉄社長室勤務)

2009年 ヒロシマピースボランティア(現任)

2009年 9 月以降、毎月最低 1 回広島へ行き、活動している。

2015年 広島市 被爆体験伝承者(現任)

2018年 くにたち原爆・東京大空襲体験伝承者アドバイザー(現任)

※ヒロシマピースボランティア:

広島平和記念資料館・平和記念公園をボランティアでガイドする資料館直轄組織

※くにたち原爆・東京大空襲体験伝承者:

広島・長崎以外では唯一、行政主導により要請された伝承者(広島原爆・長崎原爆・東京大空襲を伝承)



● 派遣者発表 《沖縄》



1 日野第一中学校 3年 さいとう しほ
齊藤 信穂 さん

日野第一中学校 3年生の齊藤信穂です。

私は平和派遣事業で沖縄県に行きました。

なぜ、沖縄を選んだかという、沖縄は日本で唯一、地上戦が繰り広げられた場所だからです。歴史の授業では戦争について知識として学ぶことしかできませんでした。それゆえ、実際に地上戦が繰り広げられた土地で、知識や情報だけでは理解できない体験を通して歴史を学ぶことで、より平和学習への理解が深まると考えました。

現地では、はじめに「ひめゆりの塔」へ行きました。

ひめゆりとは沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の二つの学校の愛称であり、そのうち、陸運病院に動員された生徒と教師をひめゆり学徒隊と呼びます。ひめゆりの塔にあったガマにはひめゆり学徒隊を含めた約100名が避難していましたが、早朝に米軍のガス弾攻撃を受け、約80名が命を落としたそうです。私は、米軍の悲惨な攻撃法に胸を痛めました。その横を進んで行くと平和祈念資料館があり、ひめゆり学徒隊について、戦前、戦中、戦後の時系列にそって展示されていました。私はそこでどのようにしてひめゆり学徒隊が戦争に巻き込まれたのかを学びました。動員命令が出され、生徒のうち240名がひめゆり学徒隊として動員され、主に患者の世話をしていたそうです。そこから約二か月半で解散命令が出され、生徒たちは自分の力で生きていくことを言い渡されました。それは今まで以上に過酷なもので、数日間で100名あまりの生徒が亡くなりました。また、当時の軍国主義の教育により、自決する生徒も少なくはなかったようです。私はこれを聞いて、かつての教育の悲惨さを知るとともに、戦争に対する教育がどれほど大切なものか理解しました。

次に平和祈念公園のメイン通路を通り平和の広場へ行きました。

メイン通路は6月23日の日の出の方向に合わせて設置されていて、沖縄ではこの日を「慰霊の日」と定め、県民の休日となっています。平和の広場からは、平和の広場を中心に円弧の形で広がりを持って配置された刻銘碑「平和の礎」を見ることができます。そこには、沖縄戦などで亡くなった、全ての人の名前が刻まれていて、私はその名の多さに驚きました。

メイン通路は今では復興されてきれいな道になっているけれど、戦争中の悲惨な状態を重ねると、足取りが重くなりました。

最後に「旧海軍司令壕」に行きました。

旧海軍司令壕は、深さ450mほどの壕です。使われていた壕にそのまま入

ることが出来るという貴重な体験ができました。壕が深くなるにつれ、空気が重くなるのを感じ、こんな狭い空間に最大で 4000 人もの兵士が滞在していたことに驚きました。

沖縄ではこのような貴重な体験を通して、私は平和の大切さを再認識すると同時に、また同じことを繰り返している世界に異常さを感じました。

世代が変わって行くと戦争のことを忘れてしまいがちで、しだいに戦争の恐ろしさは消えてしまいます。私たちに必要なことは戦争の恐ろしさと平和の大切さを理解することではないでしょうか。私は将来、日本が逆戻りしないために、憲法への関心を深め、政治への参加を積極的にしていきたいと思っています。





● 派遣者発表 《長崎》



2 平山中学校

いまかわ けいご
1年 今川 桂吾 さん

1945年8月9日、午前11時2分、長崎に一発の原子爆弾が炸裂しました。そして、一瞬にして七万人もの人の命を奪いました。私は今年の春休みに、原爆ドームと広島平和記念資料館を訪れました。そこには多くの原爆の爪痕が残されていました。核兵器のない恒久平和の世界を築き上げようとする一方で、戦争の記憶や教訓の風化が心配されています。第二の被爆地となった長崎へ赴き、そこにある史実を学びたいと思い、本派遣事業に参加しました。

私が長崎原爆資料館を見学し一番印象に残ったことは、原爆により多くの子供の命が奪われたことです。三菱の造船所などがある長崎の市街地に原爆を投下する予定でしたが、第一爆撃目標都市小倉と同じく雲がかかっていたため断念。急遽目標地帯から六百メートルほど北にそれた上空で投下されました。学校や民家が多かった所です。夏休みだったこともあり、一部の子供は被害の少ない所へ遊びに行っており助かった人もいます。しかし、爆心地から七百メートル離れた山里小学校の千六百人の児童のうち、三百人しか助かりませんでした。また、後遺症が残っていたり差別を受けたりするなど、その後も苦しい人生を送ることになりました。自分と同年代の生徒が犠牲になっていることを知り、胸が痛くなりました。

私は資料館を見学した後、如己堂を訪れました。如己堂は、永井隆博士が幼い子供二人とくらしていた二畳ほどの小さな家です。永井博士は放射線医師となり放射線の研究をしていましたが、白血病になり余命三年と診断されます。そんな中、原爆が落とされ大きなけがを負います。しかし、我が身もかえりみず生き残った医師や看護師と共に救護活動を行います。けれども症状が悪化し、寝たきりになってしまいます。それでも原爆障害の研究を献身的に取り組み、十七冊もの本を書き人々に平和と命の大切さを訴えました。私は、自分がけがを負っていても人を助け、世界に平和の大切さを発信した博士の姿に感銘を受けました。今の平和を守り維持し続けていくためには、後世へ被害や命の尊さを語り継ぐ必要があり、私たちはその使命があると思いました。

今回の派遣事業を通して、戦争や原爆について本などを讀んだりしてある程度は知っていましたが、実際に被災した地に訪れることで多くのことを学ぶことができました。多くの方が水を求めて亡くなっていたため、平和公園や追悼平和祈念館には噴水などがあり、遺族や長崎の人の思いを繋いでいるなど現地に行くことで初めて知ることも数多くありました。展示物を見て平和案内人の話を聞いているうちに、心が苦しくなり逃げ出したくな

った時もありました。しかし、これが実際に起こった事実だということを肝に銘じ、二度と同じ過ちを繰り返さぬよう、平和の意義について継承していきたいと思います。





think 原爆・平和 【NAGASAKI】

日野第六小学校 6年 難波佑成

—▶核兵器のない地球🌍へ▶—

ぼくは、9月10日～9月12日にかけて
長崎県の長崎市に行って原爆・平和について学びました。
現地で学んだ原爆・平和について報告します。



はじめに

- 9月23日西九州新幹線が長崎～武雄温泉間に開業した。という嬉しいニュースがありますが、
 - 1945年8月9日(木) 午前11時2分にアメリカのファットマンといわれる原子爆弾が長崎の町に落ちた。
 - 何人犠牲になったのか？
 - また「なぜ長崎の町に原子爆弾が落ちてしまったのか？」
- ぼくは、この2つの疑問を持ち、長崎に行きました。

1 爆心地公園

爆心地公園には、原爆が落ちた中心碑がある。千羽鶴や花束が飾られていて時間の流れがとてもゆっくりと感じられる静かな場所でした。

2 原爆資料館

この原爆資料館では、落ちた時刻で止まってしまった柱時計や学校の給水タンクの脚が溶けてしまったものなど、その当時の物がそのまま残されています。B29から落とされた原子爆弾【ファットマン】が地上500メートルのところで爆発し、半径約4キロ圏内にいた人は、100%の確率で死んでしまったことに衝撃を受けました。また、特に印象に残っているのは、爆弾の熱で顔の皮膚が溶けてしまっている男の子の写真です。今でも考えれば思い出すぐらいの衝撃的なものでした。

では、原爆がなぜ長崎に落ちたのか?それは、アメリカ軍の狙いは日本の兵器工場を攻撃するためだった。第一候補は北九州、第二候補は長崎、まず向かった北九州は、天候が悪かったため原爆が落とせなかった。次に向かった長崎も天候が悪かったが、たまたま雲の切れ間があり、その下に兵器の工場があったため、原爆は落とされた。その時の説明やアメリカ軍が撮った写真など、たくさん資料がありました。

ホールで、小学校の先生が実際に被爆した時の手作り紙芝居をやっていて、原爆の恐ろしさを伝えていました。

3 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

この建物は、2003年に全ての被爆者を追悼し、平和を願う施設としてつくられました。この施設に死者名簿が保管されていて、今年現在は196冊で192310人の方が亡くなってしまったことを知ってとても悲しくなった。

また、この施設の追悼空間吹抜は、水がほしかった人のために、水を流し、暖かい光が差し込む安らかな追悼空間でした。

4 平和公園

平和公園には、長崎出身の北村西望【きたむらさいぼう】さんが作った大きな平和像があり、天に伸びている右腕は、原爆の脅威を示し、水平に伸びている左腕は、平和を表している。軽く閉ざした目は、戦争犠牲者の冥福を祈っている。公園内にある平和の泉は、平和の鳩の羽ばたきを表していて水がほしい人のことを考えて作られた。

5 浦上天主堂・(旧)浦上天主堂

旧浦上天主堂は原爆により崩れ、約30メートルぐらい飛んでしまった。1959年に現在の浦上天主堂が再建

されたが、今でも(旧)浦上天主堂の一部分は爆心地公園や原爆資料館に移築されたり、浦上天主堂の敷地内には当時のまま、崩れた建物の一部が残こされていました。

6 永井隆記念館・山里小学校

永井隆さんは、医者として放射線をあび続けてしまったことで白血病になってしまい、余命3年と診断された2か月後に原爆が落ち、永井隆さんは長崎医科大学にいて奇跡的に助かったが、とても大きなけがをしました。でも、被爆した人を助けるために必死に治療をつづけたそうです。

永井隆さんの自宅の近くにある山里小学校では、20個以上の防空壕を先生たち自ら子供達のために掘ったが、夏休み中だった為、ほとんどの子供は亡くなり、生き残った子供たちを少しでも元気にしたいと永井隆さんは山里小学校に【あの子】という曲をおくったそうです。

<まとめ>

この平和派遣事業を通して、長崎の原爆について、ぼくはたった1発の原爆で約19万人の方が亡くなってしまったことを知った。77年たった今でも、毎年亡くなっている人がいることにもおどろいた。そして「なぜ、長崎の町に原子爆弾が落ちたのか」がやっとわかりました。それは、悪天候の中、たまたま長崎の兵器工場の上に雲の切れ間があり、長崎の町に落とされてしまったこと。

日野市の人口よりも多い人が、1発の原子爆弾で亡くなってしまった事が信じられませんでした。

現在、ウクライナとロシアが戦い、また核兵器におびやかされています。「戦争はしない、核兵器は使わない」日本では当たり前とっていたことが、世界では当たり前では無くなっています。世界の人達にも原子爆弾の恐ろしさをもっと知ってもらい、核兵器がない地球にしたいとぼくは思います。

—▶二度と核兵器を使わない地球🌍に平和を▶—





● 派遣者発表 《広島》



4 日野第二中学校 1年 あめみや しょうた
雨宮 将太 さん

日野市平和派遣事業に参加して



広島平和記念資料館

8月7日一日目は広島平和記念資料館に行きました。前日は毎年開催される平和記念式典の翌日とあり、ところどころに多くの花が献花されていました。

はじめに被爆伝承者の講和を聞きました。伝承者は父親が被爆者という証言をもとに原爆投下による被害の様子を語っていただきました。その日は朝から警報が鳴っては治まりと非難しては作業に戻るといった状況を繰り返していたそうです。そんな時ピカッと強い光を浴び爆風に飛ばされたそうです。一瞬の出来事で気が付いた時には崩れた建物の下敷きになっていたそうです。一命を取りとめ一緒にいた人を探そうと歩き始めると、そこはまさに地獄絵図、街は一瞬にして破壊され、あちこちで火事も起こっていました。体が溶けかかった姿で助けを求めている人、熱さから逃れるために川に飛び込む人、倒れた建物の下敷きになり亡くなっている人、そのまま焼け死んでいた人等、とても恐ろしい世界になっていたと聞きました。結果的には生き残った人は殆どが建物の下敷きになった人で、まともに火を浴びた人は即死だったそうです。

一命を取りとめた人も原爆の症状により徐々に弱っていき亡くなる人、また後遺症と闘いながらも最終的に亡くなる人が多かったそうです。この症状は広島・長崎で直接被爆を受けていない人でも後日家族や知人を探しに来た人、ケガ人救助に入った人等、この地に足を踏み入れた人達も同じ症状に悩まされたそうです。

広島に原爆が落とされたのは何故か、それは原爆の破壊力がどのくらいあるのか実験も兼ねていたと聞いて驚きました。原爆投下の候補地として東京は既に大空襲でめっちゃくちゃになっている。破壊されていないきれいな町でどれだけの被害を受けるかを知るための実験でもあり広島が選ばれた。そして2日後には小倉が候補だったが当日の天候の状況で長崎が選ばれ原爆が落とされたと聞き恐怖を感じました。

展示室では、黒焦げになった三輪車、中身が焦げて炭になってしまったお

弁当箱、人が座っていた石のベンチにはそのまま人影が残ったままで、本当に一瞬の出来事だったということが分かりました。

原爆の熱線は 3500～4000 度、鉄を溶かす温度が約 1500 度と聞きました僕はそれを聞いて想像ができません、原爆の威力の恐ろしさを感じました。

核・平和関連イベント

別の会場では平和関連イベントとして、再現ドラマが上映されました。内容は現在の高校生が夏休みの宿題で被爆者の生い立ち経験を聞き出し再現するドラマでした。

被爆者であることを隠して生きていた男性の生い立ちが印象的でした。その人は好きな人がいたけれど、被爆者から生まれてきた子供は障害を持って生まれるという差別を受け、自分の気持ちを好きな人には伝えられず、結婚は諦めたという内容でした。

当時は、「ピカドンから毒がうつる」と言って被爆者は差別を受けていたからです。しかし最終的には同じ被爆者の女性と出会い結婚しました。

結婚してからも 2 人は被爆したことを出来る限り、隠して生きていたという話でした。

奥様は、やはり原爆後遺症の癌で亡くなってしまいました。ドラマを見て、原爆の被害は長く続いていたことも知りました。

長い間、同じ日本人なのに被害にあった人達が差別を受けるのはなぜだろう？と考えました。このドラマを見て理解できた気がします。

何故、被爆を体験してその経験を語りたくないのか？

本来はどれだけ凄かったか、どれだけの辛い生い立ちになったか、二度と戦争は起こしてはいけない、と伝えたい。しかしそれを伝えることにより同時に自分が被爆者であるということを公表しなければならない、自分は良くても家族・孫に迷惑をかけたくないということで踏み切れない人が大勢いるそうです。

鉄のくじら館（海上自衛隊呉資料館）



実物の潜水艦の中に入り見ることができました。中に入るまでは、先の丸い形の潜水艦からはどうやって周りを見るのだろうと疑問に思っていたが、上に生えている望遠鏡で周りを見渡せる仕組みになっていました。簡単な作りのようですが外で自分の目で見た遠くの小さな船が、その望遠鏡で見ると間近ですごく大きな船でした。あいにくコロナ感染防止で望遠鏡の角

度を変えたり触れたりすることが出来なかったのが残念です。

海上自衛隊の人たちが、今も深い海の中で、戦争で残された機雷の処理を続け日本を守ってくれていることを知りました。

潜水艦は最長で3ヶ月くらい潜っていられるそうです。

大和ミュージアム



大和ミュージアムのシンボル 10 分の 1 戦艦「大和」、人間魚雷などの模型を見ました。世界最強と言われていた戦艦大和が、第二次世界大戦では3000人以上が乗船し、沖縄への海上特攻命令に出発、間もなく攻撃に合い沈没したことを知りました。

乗組員達の写真も展示されていて、まだ若い人達ばかりだったのが印象的です。出発前の手紙では、家族に対してここまで元気に育ててくれてありがとう。喜んで出撃します。という内容が多く、自分の命が終わることをわかりながらも戦いに行かなければならなかった人達の気持ちを想像できず悲しく複雑な気持ちになりました。

僕は今まで、いつ起こるか分からない自然災害が一番の恐怖とっていました。島国の日本は絶対安全という地域は無いと聞いたことがあります。

しかし戦争は同じ人間が人間の意志で何万人もの一般市民の命を一瞬にして奪うとい恐ろしい行為であり、また今まで平和に暮らしていた普通の人達も自分の意志では無くてもその戦いに参加しなければならないということが想像できません。

現在もロシアがウクライナを攻撃しているニュースをみます。戦争をしたくないのに攻撃されて僕と同じ年くらいの人達が犠牲になっているニュースをみると悲しくなります。他国の出来事でどうして起きた戦争かよく解りませんが早く終わって欲しいと願います。

日野市に住み、保育園から現在の中学校で友達を作り、普通に毎日を過ごしていることをあたり前に思っていました。今回の平和派遣事業に参加でき、戦争の怖さを知ったことで、普通に毎日を過ごせていることが幸せであると感じました。また戦争はしてはいけない核爆弾はなくなしてほしいと思いました。

5 日野第四中学校 1年 おおの まりか
大野 真理佳 さん

私は、平和派遣事業で広島に行きました。
以前に母から私の祖母の姉が原爆で亡くなったことや曾祖父が被爆者だったという事を聞いていたので、とても身近に感じました。今回の平和学習を通して、実際に当時一発の爆弾で広島が地獄になったことを実感しました。

①相生橋・原爆ドーム

初めに相生橋を通して原爆ドームに行きました。
相生橋は珍しいT型の形をした橋の為、原爆投下の目印にされたそうです。原爆投下後、その下の元安川が沢山の遺体で埋め尽くされたと知り声も出ないほどゾッとしました。原爆ドーム付近はとても穏やかな場所でしたが、がれきだらけで今にも崩れそうな原爆ドームが被災当時の姿のまま残されていて、地獄が広がっていたという事を教えてくれました。

②本川小学校平和資料館

次に「爆心地から一番近い学校」本川小学校にある資料館（旧校舎一部）に行きました。

この小学校は爆心地から350mととても近く、10名以上の先生と400名以上の子供たちの尊い命が一瞬で奪われました。一階には、原爆投下後の風景の写真や、唯一生徒で生き残った居森清子さんの体験談が展示されていました。地下には被爆直後の広島の様子が分かるように爆心地を中心とした半径約2.5～3kmの範囲内を再現したジオラマが置いてありました。

爆心地から1.2km以内にいた人は熱線により亡くなり、2km以内では木造家屋の倒壊やその後の火事により多くの方が犠牲となりました。3.5kmと離れた人でさえも火傷を負ったそうです。

日野市役所を中心とした時、私が通っている第四中学校は約2.5kmです。被害の範囲がとても広い事を知りました。

③原爆死没者追悼平和祈念館

次に原爆死没者追悼平和祈念館に行きました。

ここには犠牲となった方々の生前の幸せそうな家族写真が沢山ありました。この沢山の笑顔が一瞬で消え、すべてが奪い去られたという事がとても悲しかったです。

壁にはタイルで焼け野原となった広島の様子描かれていて、その数は約14万個。14万というのは原爆で亡くなった方の人数で、その多さに胸が苦しくなりました。

④広島平和記念資料館

次に広島平和記念資料館に行きました。

ここには、痛々しい火傷の写真、ボロボロに破れ血の付いた洋服、焼け焦げた三輪車、原爆の10年後白血病によって亡くなった、佐々木禎子さんが作った折り鶴などが展示してありました。どれもとても生々しく、見ているだけで鳥肌が立ちました。被爆者の方が「地獄とはこのことだ」と言う事が本当によく分かりました。

その他 原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、私の親戚が殉職した広島赤十字・原爆病院メモリアルパークなどにも行き、平和の尊さを感じました。

今、被爆者の高齢化が進み、原爆の恐ろしさを伝える人がどんどん少なくなっています。

この状況を変えるには、子供達が戦争について学び、平和について考えることが大切だと思います。

今回私は、原爆の恐ろしさを深く知ることができ、戦争は二度と起こしてはいけないものと強く思いました。なぜなら、戦争は大勢の人の尊い命を奪い、残された人の大切なものや幸せ、未来を奪ってしまうからです。世界中の人が同じように感じたら、戦争は起こらないと思います。

私はこのことをより多くの人に伝え、二度とこんな地獄を作らない世界にしたいです。

- 1 枚目：原爆ドーム
- 2 枚目：爆心地を中心にしたジオラマ（本川小学校平和資料館）
- 3 枚目：川の中の遺体を引き上げる絵ととび口（資料館展示）
- 4 枚目：焼け焦げた三輪車。持ち主の兄弟の写真（資料館展示）
- 5 枚目：ボロボロになったワンピース（資料館展示）
- 6 枚目：貞子さんの折り鶴（資料館展示）
- 7 枚目：原爆死没者慰霊碑（平和記念公園）







私は8/7～8/9まで広島に行き、戦争のことをいろいろと勉強しました。広島に行ってみたいと思ったきっかけは、ニュースでロシアがウクライナをこっげきしているのを見て「せんそうってなあに？」と母に聞いたことでした。

母の話を聞いて、私は国の戦いで人がころされてしまうことにととてもびっくりしました。そして、昔は日本でも戦争があって、たくさんの人が死んでしまったと聞いて信じられないと思いました。

戦争に興味を持った私に、母は「ひろしまのピカ」という絵本を買ってくれました。

読んでみると、私と同じ年で同じ名前の7才のみいちゃんが出てきました。

本当に悲しくてこわいお話だったので、私はこんなことが本当にあったのかどうしても知りたくなって、今回の平和派遣事業に応募しました。

広島に着いて、まず平和記念公園に行きました。

前の日に平和記念式典が行われていたので、まだテントがのこっていて花たばがたくさんそなえられていました。

平和記念資料館に入ると、原子爆弾のおそろしさがよく分かる資料がたくさんありました。

死んでしまった人の写真がたくさんあり、名前も書いてあったし、ボロボロになった服などを見て、本当にあったことだとよく分かりました。

また、資料館の中に世界地図がありました。

核兵器禁止条約に<しよめい>か<ひじゅん>をした国にしるしがついていましたが、日本のところにはしるしがなく、残念だなと思いました。

原爆ドームも見に行きました。

遠くから見るとただの古い建物に見えましたが、近くで見ると窓ガラスが一つもなく、地面にもくずれた建物が石のようにたくさん転がっていて、おどろきました。

原爆が落とされた場所の近くにある2つの小学校にも行ってみました。

本川小学校では、生徒が作った灯ろうがありました。

袋町小学校には広島県外のいろいろな小学校から送られてきた千羽づるがありました。

どちらの小学校でも原爆でほとんどの生徒や先生が亡くなったと書いていました。

今は悲しい経験を忘れず、みんなで平和を祈っているのだということが分かりました。

私が今回学んだことは、原爆のおそろしさと、戦争でなくなった一人一人の人がそれぞれ大切な人生をなくしてしまったということです。もう二度と戦争が起きないように世界のみんなが力を合わせて一人一人が平和で幸せな人生を送れる世の中になってほしいと私は思います。





7 日野第四中学校 2年 かとう ひな
加藤 日菜 さん

私は第二次世界大戦という大きな戦争を学校の授業やテレビなどを通じて聞いたりする事があり、その中で広島と長崎に原爆が落とされ、沢山の犠牲者が出た事は知っていました。

しかし、戦争や原爆でその時に人々がどんなに辛くて苦しい思いをしたのかよく知りませんでした。

今、平和な時代に生きている私たちにとって戦争は程遠いもので、このような日常が当たり前になっています。

そこで広島に落とされた原爆が人々の生活をどのように変えてしまったのか、そして私に何ができるかを学びたいと思いました。

1945年（昭和20年）8月6日にアメリカ軍により広島に原爆が投下されました。

この一瞬の出来事で約14万人が亡くなったと言われています。

原爆の爆風や熱波により即死した人たちや、爆風によって破壊された建物のガラスなどが刺さって重傷を負う人、吹き飛ばされて壁にぶつかって亡くなった方も多かった事を知りました。

また爆心地である病院は一瞬で吹き飛ばされ、中にいた約80名の職員や患者全員が即死しました。

その後、戦争で助かった人たちも原爆から放出された大量の放射線や、放射線を含んだ黒い雨で体がむしばまれ、白血病などで多くの人たちが亡くなっていきました。

戦争の中を生き延びた後も、人々は貧困や差別など多くの困難と苦悩に直面し、家族や友人を失った悲しみに耐え、心身に残る傷や病を抱えながら生きていかなければなりません。

今回、私の印象に残った事の一つは平和記念資料館で学んだ「原爆の威力」でした。

原爆の熱波は3000～4000度の温度となり、物が溶けてくっついてしまったり、その爆風により鉄筋が曲がったりしていました。衣類なども燃えたり、破けたり、血痕が残っている物が展示されていました。

そして、爆風で体の一部が吹き飛んだり、大やけどで皮膚が垂れ下がっている人、熱波で体内の水分がなくなってしまう、水を求めて川へ飛び込み力尽きた人も沢山いました。

それに対して、私は率直にとっても怖いと感じ、もし、その場にいたら自分自身は何ができるか考えてみましたが、答えはみつけれませんでした。

ただ自分が一つ思った事は、まず第一に戦争を二度と起こさない、原爆を使わせない平和な社会を作る事が大切だと思いました。

私がもう一つ印象に残った事は袋町小学校平和資料館で聞いた台風の話です。

原爆が投下された年の10月に大きな台風があり、広島市内は水害で多くのがれきや放射線が流されたとの事でした。

この影響で後に救援・救護にきてくれた人たちが放射線による被害が軽減された事を知りました。

台風で多くの人たちが亡くなってしまいましたが、一方でそれにより助かった人たちもいる事を知り、少し複雑な気持ちになりました。

今回、広島を訪問して外国の人たちが多く訪れている事に驚きを感じました。

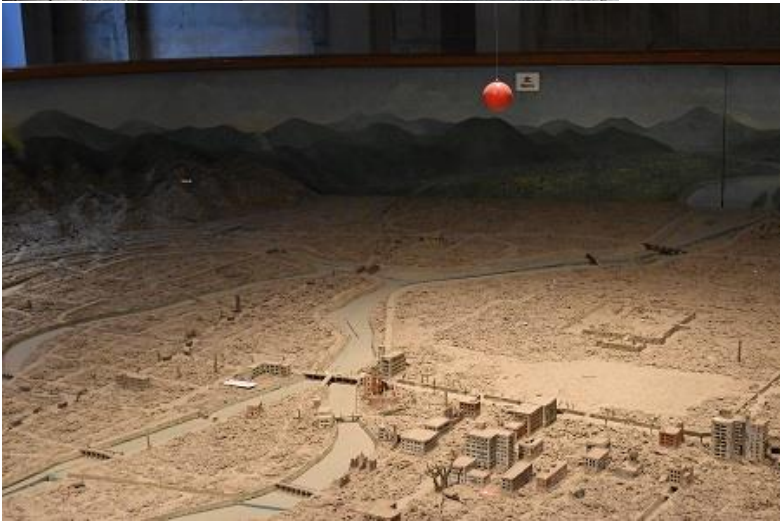
その中でもアーサー・ビナードさんという人は原爆について学び、更に原爆に関する本を書いて、人々に戦争の恐ろしさを伝えているそうです。

私は声が出せないほど恐ろしい戦争を二度と起こさないため、原爆や戦争の恐ろしさを世界中の人々が知る社会を作る事が大切だと思いますし、多くの外国人が広島を訪れてくれているので分かりあえると信じています。

しかし、世界中の人々に思いを伝える事はとても難しく、実際に被爆した人たちは年々少なくなっています。

これからは私たちが唯一の被爆国として原爆や戦争の恐ろしさを伝え、平和な世の中が作られるよう後世につないでいきたいと思います。







きたはら ゆい
8 日野第六小学校 6年 北原 佑彩 さん

私は、初めて広島に行きました。原爆については、テレビで見て知っていたし、建物が壊れた風景も見たことがありました。しかし、人が死んだり、放射線を受けて苦しんでいる姿を見たことはありませんでした。当時、広島の人口は約35万人。14万人が、投下された年のうちに亡くなっています。現在の日野市の人口が18万7千人で、日野市民とほぼ同数の人が亡くなった計算になります。たったひとつの爆弾で、これほど多くの方が一度に亡くなるなんて、驚きました。

また、被爆で苦しんで死亡した人は、2019年時点で約32万人にのぼるそうです。その年に亡くなった人と同じ人数の人々、日野市の人口に匹敵する人々がそのあとも被爆で苦しみました。

広島を訪れて、私が特に印象に残ったのは、佐々木禎子さんについてです。禎子さんは昭和18年生まれで、2歳で被爆しました。爆心地から1.7km離れていて、爆風で家の屋根は飛ばされましたが、幸いにもやけどもけがもせず、禎子さんは無傷でした。が、すぐに火事が起きたので、お母さんに背負われながら避難し、その時に、黒い雨に打たれました。この雨は放射能が含まれていました。

禎子さんは、元気に育ち、とても活発な子でした。小学校に入学し、50mを7.5秒で走り、運動会でリレーのアンカーに選ばれるほどでした。しかし、6年生の9月に顔色が悪くなり、次の年の2月に白血病であることが分かりました。入院中も明るく振舞っていましたが、病気は悪くなるばかり。10月に亡くなりました。10年間元気だったのに、黒い雨に打たれただけで、急に病気になるなんて、驚きました。それと同時に、恐ろしいと思いました。私は、禎子さんと同じ年です。もし私が禎子さんだったら、まだまだ生きたい、死にたくない、なんで私だけが...と思います。

その後、禎子さんの同級生たちは、禎子さんなど亡くなった子供たちの事を忘れないようにとの運動をして、原爆の子の像を建てました。これによって、世界中の人々に、子供たちも原爆で苦しんでいることを伝えることができた、私は思います。

また、原爆が落とされた日には、各地から子供たち（今の中学1、2年生）が集められ、建物疎開の作業をしていたことから、多くの子供たちが、爆心地周辺の屋外で、亡くなりました。建物疎開とは、空襲で火災が広がらないように、建物を壊して空き地を作ることです。その子供たちの中には、いやいや作業している子や体調が悪い子もいたそうです。そのお母さんたちは、国のためだからと送り出して、亡くなってから止めればよかったと後悔していたそうです。でも、私は、子供たちが建物疎開の

作業すること自体が、おかしいと思いました。なぜなら、この作業は大人がやるべきことだと思うからです。国のために頑張っていたのに、家族にも会えずに、亡くなったことは、悲しく、かわいそうだと思います。

平和記念資料館の後半には、原子爆弾の説明がありました。そこには原子爆弾や放射線の仕組み・アメリカの他に核兵器を使用している国などの説明がありました。その中でも原子爆弾の開発について驚きました。原子爆弾の費用は当時のお金で20億ドルとされています。また、原子爆弾を作るのにたくさんの人を使って約3年で完成したそうです。さらに、原子爆弾は、「アメリカは強い」と、思わせるためのものだったそうです。

私は、たくさんのお金と人を使い、約32万人の命を犠牲にしてでも自分の国を強く見せたいのかと疑問に思いました。それに、もし私が原子爆弾を作る一人だったら、私達のせいでたくさんの命がなくなったという責任感や苦しみをいっぱいになると思いました。なので私は、戦争をしてはならないという思いが強くなりました。

最後に、大和ミュージアムに行きました。

大和ミュージアムには塚本太郎さんという人の話がありました。

塚本太郎さんは、慶応大学を進学しその後、海軍に入隊しました。回天という人間が乗って操縦する魚雷（水中を自走する魚型の兵器）に乗り、22歳という若さで戦死しました。

そこには、出発する前に家族や親族に残したレコードがありました。そのレコードには、故郷での楽しい思い出や家族と過ごした日常を懐かしく振り返っていましたが、最後には、「精神のすべてをこの決戦の一瞬にささげよう。みんなさようなら。元気でいきます。」と録音されていました。

その録音を聞いて私は、なぜこんな頭がよく、若くて善良な人が行かなければならないのか疑問に思いました。父に聞いてみると、男の人はみんな戦争に行ったり戦死して、戦争が長引くにつれて、どんどん若い人や学生が戦争に行くようになったのだと、教えてくれました。だからと言って若い人をいかせるのはよくないと思いました。しかも、塚本太郎さんは、その回天には帰りの燃料が入っていないという事、死ぬ運命だったという事に、とても悲しいと思いました。

私は広島に行ってたくさんの悲しみや苦しみを学びました。そして、今戦争をしているウクライナで核兵器が使われるかもしれないと言われています。でも、その核兵器を使うことは誰もが望んでいないことです。今回、広島で学んだことを生かして世界中に核兵器の恐ろしさを発信できるようなことをしていきたいです。でもまずは、身近な人から伝えていきたいです。

訪問日 9/23～25

訪問先 広島市 広島平和記念資料館

平和記念公園

原爆犠牲国民学校 教師と子供の碑、

原爆死没者慰霊碑、平和の灯

原爆の子の像、平和の鐘、平和の時計塔、祈りの像

原爆ドーム

平和記念公園レストハウス

被爆ピアノ、当時から残る地下室（ひとり生き残った
人の話）

本川小学校平和資料館

呉市

大和ミュージアム

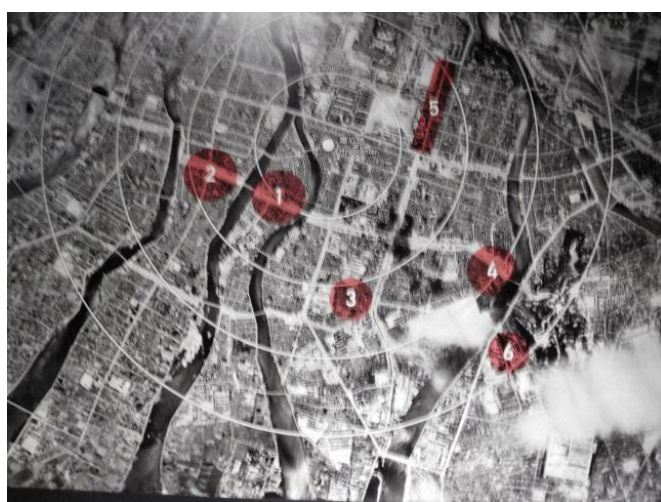


教師と子供の碑

太き骨は先生ならむ

そのそばに

小さきあたまの骨あつまりり



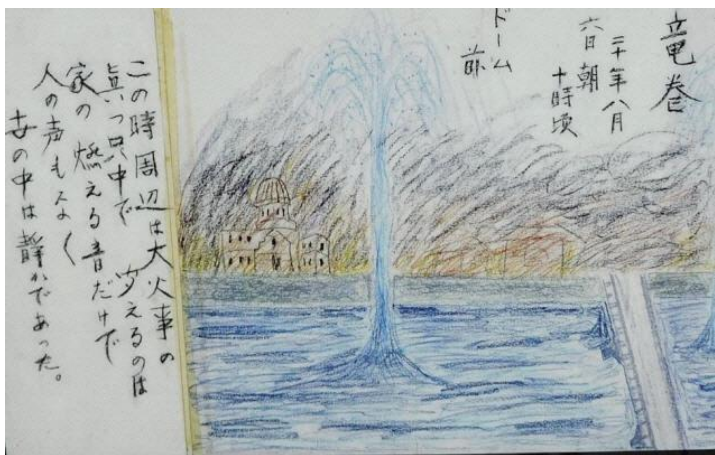
爆心地と建物疎開の位置



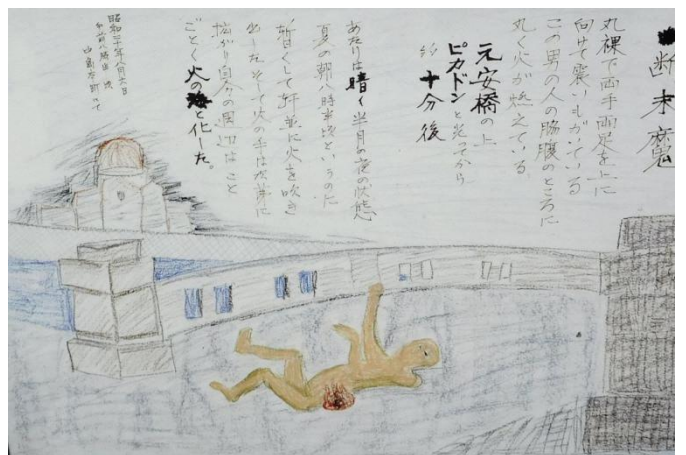
原爆の子の像



本川小学校平和資料館



野村さんの描いた被爆当時(午前10時ごろ)の状況
作:野村英三 提供:広島平和記念資料館



野村さんの描いた被爆当時(午前8時25分ごろ)の状況
作:野村英三 提供:広島平和記念資料館

地下室でひとり生き残った人がかいた画



9 大坂上中学校 1年 やぎした こゆき
八木下 湖雪 さん

1945年8月6日午前8時15分に広島に強い光、風、音が響き渡りました。その場面を見た人はそれが世界初の原爆によって引き起こされた事とは知る由も無かったのです。

1つの原爆で約14万人の命が失われ、広島市の建物の90%が破壊または消失してしまいました。熱線、爆風、高熱火災、放射線などにより人間、植物、建物などに広く被害をもたらしました。爆心地付近の小学校では480人中2人、レストハウスでは37人中1人しか生き残れなかったそうです。このように、沢山の人の命が無差別に一瞬にして奪われました。原爆の被害の中でも放射線は急性障害という被爆直後の症状だけでなく、後障害という後になっても様々な障害を引き起こし被爆者の健康を現在もなお脅かし続けています。なので、原爆が投下され被爆した直後は無傷でもいつ病気が発症するか分からないまま怯えて暮らしている人がまだいるのです。

その他にも被爆した人は家族や友人を失った悲しみに耐え、心身に残る傷や病を抱えながら生きていかなければならなかった事を知りました。

私はその話を聞いて、改めて原爆の怖さを感じました。

原爆以外にも、戦争に行った多くの人たちが亡くなっています。呉市にある大和ミュージアムでは、神風特別攻撃隊に入隊した人が家族へ託した手紙を読みました。神風特別攻撃隊とは大日本帝国海軍によって編成された爆装航空機による体当たり攻撃隊の事です。この部隊は決死の任務を行う部隊です。このような恐ろしい事がたった77年前の日本では当たり前に行われていたなんて、今私が暮らしている日本では全く想像もできない事です。

広島市の平和記念公園では平和の灯を見ました。この灯は水を求めて止まなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界の恒久平和を願い求める事を目的として建てられました。この灯は「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃え続ける」という反核悲願の思いが強くこもっています。私は一刻も早く核の無い世界になり、この灯が核の無い平和の象徴になる事を心から願っています。

今ロシアによるウクライナ侵攻で、ロシアが核の使用をちらつかせ、世界中を脅かしています。「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他の人の幸福の中にこそ自分の幸福もあるのだ」という有名な言葉のように、世界中の国々が他国の幸せも考えた上で、自国の幸せや発展を考えていく気持ちがあれば世界平和に繋がっていくと私は思います。

最後に、私は先日中学校の音楽祭で「空は今」という合唱曲を歌いました。その歌は、原爆投下後の空が曇り暗くて何も見えない時でも、必ず晴れる日がくるから希望を持って未来を切り開いて行って欲しいという意味が込められています。もう二度とどこの国の空にも原爆が投下される事無く、平和な青空が世界中に広がる事を強く願っています。





幸せな日常を奪った原爆から学ぶこと

1945年8月6日。その日は、日本人として絶対に知っていなければならない日です。広島に原子爆弾が投下された日。たくさん大切な命が奪われた日。そう答えなければなりません。ですが、悲しいことで、8月6日に何が起こったのか、知らない大人がまだいるかもしれません。私はそんな人たちに、原爆の悲惨さを、「平和」の大切さを伝えたいと思います。

—8月6日、その実相—

私は、平和記念資料館に行きました。館内は少し暗く、なんだか悲しい雰囲気でした。本館で被爆の実相を見たとき、私は絶句しました。もう目も当てられないくらい、残酷で、恐ろしい絵や写真が貼ってありました。現実と切り離されたような、地獄を描いたもの。三輪車、焦げた衣服、真っ黒になったお弁当箱など。なくなってしまった人の遺品が原爆の悲惨さを私たちに語りかけているようでした。なくなってしまった人ひとりひとりに、それぞれの「未来」があったはずなのに…。それを奪ったのが原爆です。ある人は、三輪車で遊んでいました。ある人は、お弁当を楽しみにしていました。みんな、自分の幸せをつかみ取ろうとしていました。その点では、わたしたちと同じだったのです。なにも、変わらなかったのです。なのに…あの日、いつもの日常が残酷なものにかわりました。やけどをしたり、病気になったり、とても苦しかったと思います。そんな酷い原爆を、兵器を、戦争を、私たちはこの世からなくしていかなければなりません。

—原爆をこの世からなくす—

私は、人類の負の遺産の原爆ドームを見て、原爆の恐ろしさを改めて感じた後、原爆を（核兵器を）なくす署名にサインしました。署名するのはそれが初めてだったので、少し緊張しましたが、ちゃんとしっかり署名しました。その時に、平和の象徴である折り鶴をもらって、それは今私の勉強机に置かれています。自分で「世界平和」と書いて。私は、もっと多くの人に、署名にサインしてもらいたいと思います。原爆とは何なのか。どれほど恐ろしくて、悲惨なのか。そのことを知った上で、署名していただければと思います。日本は、世界で唯一原爆を落とされた国です。私たちは核兵器の怖さ、原爆の怖さを知っています。日本はどの国よりも知っているはずですが、だから、私たちが原爆の怖さ、恐ろしさ、悲惨さを伝えていかなければなりません。そして、平和のために、原爆をなくすのです。原

爆をなくすことはゴールではありません。私たちのゴールは「平和」です。それから、私の将来の夢は小説家です。みんなを元気づけられて、穏やかな気持ちになれる作品を書きたいと思っています。平和を実現できたらと思います。その第一歩として、私は原爆のことを知って、平和について考えました。安心して、みんなが楽しく笑って暮らせる。そんな世の中を、つくっていかねばなりません。原爆から学ばなければいけません。核兵器や戦争は、この世にあってはならないものだ。私は、このことが平和と将来の夢を真剣に考えるきっかけになりました。未来がどうなっているのかなんて誰にも分かりません。でも、わたしは、そのとき優しい心で自分にできることを精一杯頑張りたいと思います。みんなが笑って暮らせるように、頑張っていきます。ご清聴ありがとうございました、これで終わります。



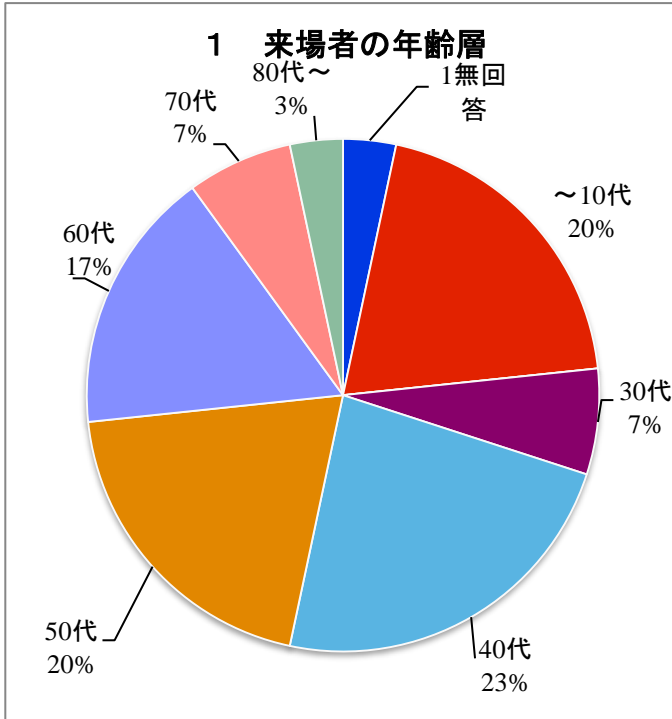




来場者アンケート



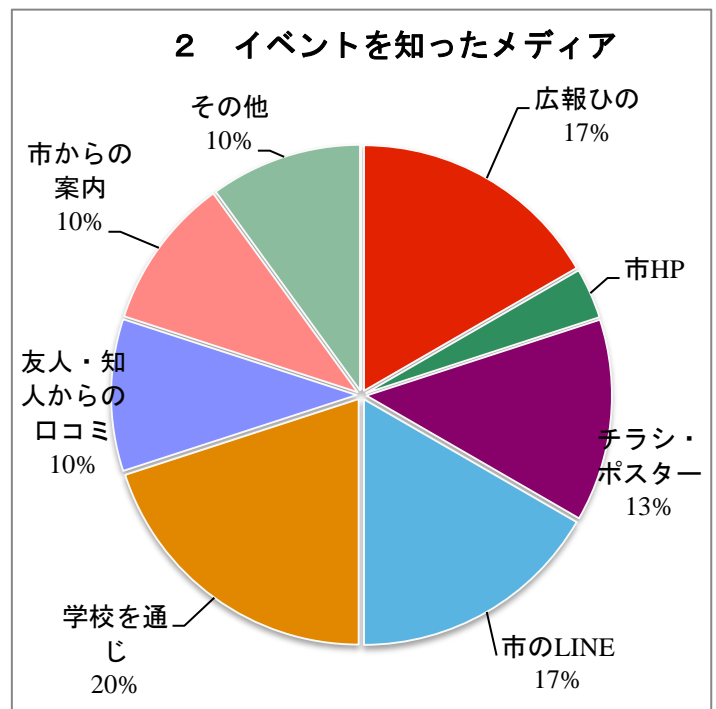
(1) 御来場者の年齢層



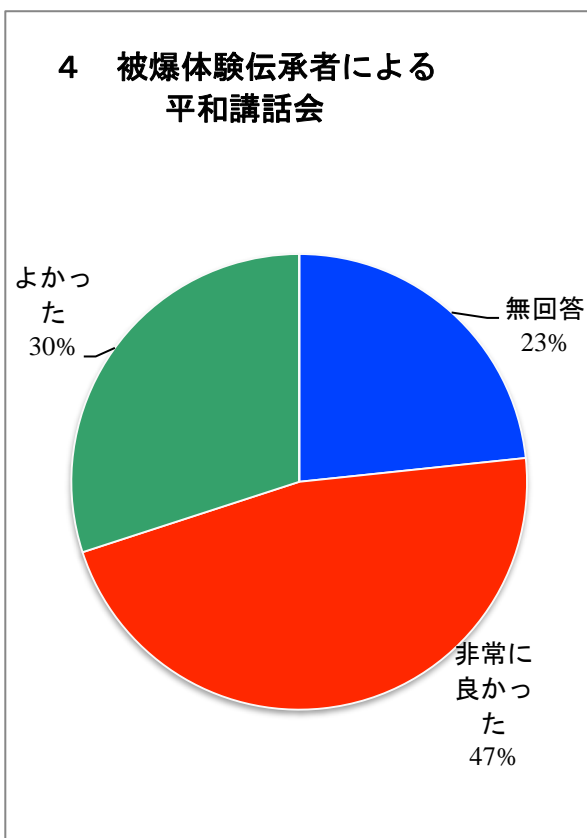
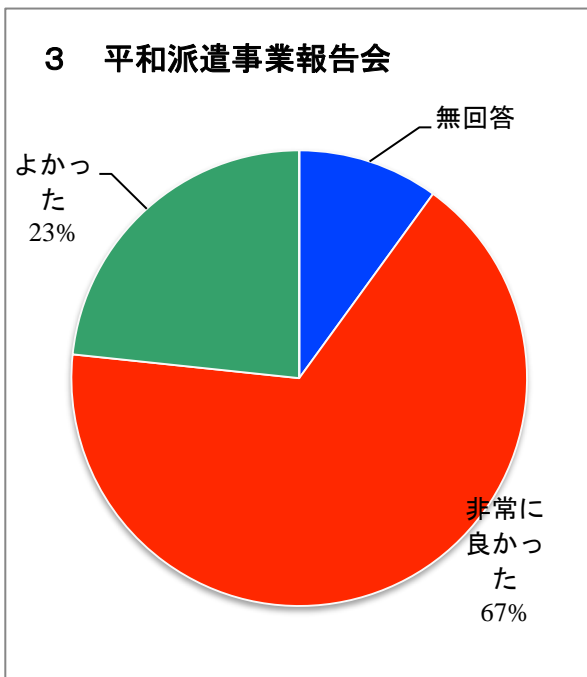
幅広い年代の方のご参加がありました。今後もあらゆる世代の方に来ていただけるようにしていきたいと思います。

(2) イベントを知ったメディア

「広報ひの」や学校を通じて配布したチラシ、LINEをなど、皆さま色々なメディアで知ってご参加いただきました。LINEの割合が、昨年より上がっています。



(3) 感想



参加された多くの方が「よかった」、「非常によかった」と回答されており、大変好評でした。自由記載の欄では、「皆さんとてもよく学習され、気持ちの伝わる発表でした。ぜひこれからも平和を伝えていく人でいてほしいと思いました。」「伝承者講和で当時の考え方がおかしい事をあえて答えを言わず、問いかける話し方が印象的だったし、良かった。」などのお声をいただきました。

「大変よい事業を、今後も継続して下さい。」とのお声もいただきました。今後も継続してまいりたいと考えています。

日野市民憲章／日野市核兵器廃絶・平和都市宣言

日野市民憲章

昭和 58 年 1 月 1 日制定

わたくしたち日野市民は、多摩川・浅川につづく平野と丘陵の自然環境に恵まれたこのまちを、生活の中のふるさとと考え、みんなのしあわせのためにこの市民憲章を定めます。

- 1 元気に働き いきいきとして 心ゆたかなまちをつくりましょう
- 1 手をつなぎ ともに健康で 明るいまちをつくりましょう
- 1 自然を守り 緑と清流と太陽の 美しいまちをつくりましょう
- 1 人を大切にし 弱い人にも子どもにも 思いやりのあるまちをつくりましょう
- 1 文化をつちかい うるおいのある 平和なまちをつくりましょう

日野市核兵器廃絶・平和都市宣言

昭和 57 年 10 月 8 日議決

巨大な量の核兵器は、米ソ両国の戦略兵器制限交渉などをもつてしても、もはやその拡大を止められない事態となつている。

ひとたび核兵器が使用されることになれば、その結果は全人類とその文明の滅亡であることはいうまでもない。

日野市は、核兵器が地球上から姿を消す日まで、その廃絶を叫び、平和が市民生活の基本であるとの理念のもとに、ここに日野市が核兵器廃絶・平和都市であることを宣言する。

令和4年度日野市平和事業 平和派遣事業成果報告書<沖縄・長崎・広島>

令和5年2月 発行

発行 日野市企画部平和と人権課
東京都日野市多摩平2丁目9番地
多摩平の森ふれあい館
電話 (042) 584-2733

